シリーズ 授業と生徒を語る

「I was born」の授業　第４回〈全５回〉

渡辺　良光

「I was born」の６連・７連を再掲する。

父は無言で暫く歩いた後、思いがけない話をした。

――蜉蝣という虫はね。生まれてから二、三日で死ぬんだそうだが　それなら一体何の為に世の中へ出てくるのかと　そんな事がひどく気になった頃があってね――

僕は父を見た。父は続けた。

――友人にその話をしたら　或日、これが蜉蝣の雌だといって拡大鏡で見せてくれた。説明によると　口は全く退化して食物を摂るに適しない。胃の腑を開いても　入っているのは空気ばかり。見ると、その通りなんだ。ところが　卵だけは腹の中にぎっしり充満していて　ほっそりした胸の方にまで及んでいる。それはまるで　目まぐるしく繰り返される生き死にの悲しみが　咽喉もとまでこみあげているように見えるのだ。つめたい光りの粒々だったね。私が友人の方を振り向いて＜卵＞というと彼も肯いて答えた。＜せつなげだね＞。そんなことがあってから間もなくのことだったんだよ。お母さんがお前を生み落としてすぐに死なれたのは――。

父の話のそれからあとは　もう覚えていない。ただひとつ痛みのように切なく　僕の脳裡に灼きついたものがあった。

――ほっそりした母の　胸の方まで　息苦しくふさいでいた白い僕の肉体――。

発問Ｘ　『彼も肯いて答えた。＜せつなげだね＞』とあるが『彼』とは誰のことか？また、何故『肯いて』『＜せつなげだね＞と言ったのか？説明せよ。

『彼』の方は、すぐに「『父』の『友人』」と答えが出るだろう。『肯いて』の方は、成績の良い生徒が、「友人も＜卵＞が、『目まぐるしく繰り返される生き死にの悲しみが　咽喉もとまで　こみあげているように見え』ていたから。」と答えられるだろう。

ここからは、私の鑑賞というべきものになる。『友人』が『説明』に＜卵＞のことを言わなかったのは、見れば分かることであり、それこそ見せたかったものだからではないだろうか。『＜せつなげだね＞』と、『僕』の『父』が感じた『生き死にの悲しみ』のイメージと同様の言葉が出せたのは、『僕』の『父』が、蜉蝣について『ひどく気になった』理由を理解していたからではないか。例えば、『僕』を生むと、母体の命が危ないということを、『父』も『友人』も知っていたのではないか。だから『蜉蝣の雌』を、拡大鏡で見せたのだろう。そんな経験があったからこそ、『僕』から『I was born さ。受身形だよ。正しく言うと人間は生まれさせられるんだ。自分の意志ではないんだね』と言われたとき、『父』はこの話をしようと思ったのではないか。『暫く』は、自分の経験を思い出し、まとめる時間だったのかもしれない。それにしては、少し早い気もするが・・・

確認の発問「『父の話のそれからあとは　もう覚えていない。』とあるが、『それからあと』の『それ』は、何を指しているか？また、『もう覚えていない』の『もう』は、いつ頃のことだと思えるか？答えよ。」『それ』の方は、「『お母さんがお前（僕）を産み落としてすぐに死なれたのは――。』のあと。」と答えられる。『もう』は、なかなか難しい。正答と言えそうなのは、「作者がこの詩を書いた頃」であろうが、私自身、吉野弘がこの詩を発表した

年も調べてないので、『僕』が中三として、十年も経った二十五歳以上ならいつ頃でも、正答としよう。どう捉えようと、「あなたまかせ」というのも、詩の読み方であろう。

『僕』ってすごいね。お父さんから『蜉蝣』の話と『お母さん』の死のことを聞いただけですぐ『――ほっそりした母の　胸の方まで息苦しくふさいでいた白い僕の肉体――。』なんてイメージできるのは、とても感受性が強いんだね。とかつぶやきながら、

発問XI　『白い僕の肉体』とあるが、普通、お腹の中の子どもは何色か？

「何故『白い』のか？」とストレートに聞かないのも、教師の意地悪さだろうか。「お腹の中の子どもなど見たことのない生徒たちは、途惑う。気の利いた生徒が、「赤ちゃんだから、赤。」と答える。正答である。補足の発問①「では、ありえない『白い僕の肉体』と書いた理由を説明せよ。」と問う。大抵「『＜卵＞』と同じ色だから。」とか、「『つめたい　光りの粒々』の色が、白だから。」などと答えが出る。これも正答である。教師が「そうだね。『卵だけは腹の中にぎっしり充満していて　ほっそりした胸の方にまで及んでいる』と『ほっそりした母の　胸の方まで　息苦しくふさいでいた白い僕の肉体』は、同じイメージだね。」と、生徒のイメージを定着させるように補足説明する。

今は「肌色」と言う表現も差別用語として使われなくなったという。私も白人や黒人の胎児の色や生まれたての「ベイビー」の肌の色は知らない。この表現や私の解釈が「差別」に当たるのか？そうだとしたら、「I was born」のような優れた詩が、一つ消えることになると思う。

確認の発問「さあ、初めの方にあった『白い女』に戻ろう。『白い女』はどんな女だろうか？」と改めて問う。私の経験では、「お母さんの幽霊」が一番多い答えであった。『青い夕靄の奥から浮き出るように』のイメージが強すぎるのだろう。「そうだね。」としつつ、「幽霊ってのは、現実味がないな。『物憂げ』の意味は何だっけ？」と、また、辞書で確認させる。私の使っている辞書には、【物憂い・懶い】の見出しで「たいぎで気がすすまない。なんとなくゆううつで、けだるい。」とある。「『たいぎ』って分かるかな。風邪ひいて熱なんか出ると、何をするのもだるい気がするだろう。そんな感じなんだ。『白い女』は何故『物憂げ』に、だるそうに歩いていたのかな？」と問い掛け、やっと「妊娠しているから。」が出てくる。「そうだね。この時すでに『白い僕の肉体』のイメージを持っていた「作者」には、どの妊婦さんにも『胸の方まで息苦しくふさいで』いる『白い』胎児がお腹にいるように思えたんじゃないかな。『白い』胎児がお腹にいるから『白い女』と書いたんだ。」と、自分の解釈を述べ、「幽霊かもしれないけどね。」と付け加えておく。

これで、「I was born」の全体が見渡せる。茨木のり子は「詩のこころを読む」の中で、「この詩は、英訳もされていますが英語圏で暮らす人々にはいっそう新鮮だったかもしれないのです。というのも、自国語には慣れきっていて、文法なんかは日々考えもせずしゃべっているのですから。」と解説している

丁度英語を習い始めだが、もう「受身形」は知っている中学二・三年生の『僕』を設定し、『僕』を生んですぐ亡くなった母の墓参りの盆の夕、『身重』の『白い女』と擦れ違わせる。『僕』はふと＜生まれる＞という英語『I was born』が『受身形』であることを『諒解』し、『父』に、『人間は生まれさせられるんだ。自分の意志ではないんだね』と、『文法上の単純な発見』の喜びを『興奮』をもって語らせる。そんな『僕』に、『父』は『僕』が生まれるすぐ前、『僕』の『お母さん』が亡くなるすぐ前に、『生まれてから二、三日で死ぬ』『蜉蝣』の生が、『ひどく気になっ』て、『友人』に話すと、『友人』が『蜉蝣の雌』を拡大鏡で見せてくれた話を始めた。

（つづく）